

第6回

はるかなる山の呼び声

～テーブルマウンテンで出会った奇跡

矢原徹一



テーブルマウンテンの景観 (Wikipedia より)

ケープタウンのホテルにつくと、テーブルマウンテンが目の前にそぞり立っていた。

テーブルマウンテンは、南アフリカ共和国ケープタウン市の西側にそびえる断崖に取り囲まれた山地である。最も標高が高い地点は 1086m。山頂部には約 3km にわたる平坦な台地が広がり、ツツジ科のエリカ類が優占する低木林が発達している。エリカ類は年中開花してお花畠をつくり、エメラルドグリーンに輝くタイヨウチョウの仲間の鳥がその花にやってくる。一方、市街地に接した山麓部から崖下の斜面にかけては、フィンボスと呼ばれる低木林が発達し、南アフリカ共和国の国花キングプロテアを始めとする、プロテアの仲間が群生している。エリカ類の花は小型だが、プロテア類の花は大型で、フィンボスのお花畠は頂上の台地とは異なる豪華な景色を見せてくれる。

いまではこうして、テーブルマウンテンの植生を紹介できるが、2007 年に初めて訪問するまで、私はテーブルマウンテンについての知識をまったく持っていなかった。ケープタウンの市街地に近く、ホテルから歩いて行ける距離にあるとは、まったく想像していなかったのだ。

それは私の初めてのアフリカ訪問だった。生物多様性国際研究プログラムの科学委員をつとめることになった私は、科学委員会に出席するために、指定されたホテルを予約し、野外でることはまったく想定せずに、ケープタウンへと飛んだ。ケープタウンは治安が悪いことで有名な都市である。タクシーでもしばしば事件が発生するので、会議の事務局が手配してくれたりムジンで空港からホテルに向かった。そしてホテルに着くと、目の前にテーブルマウンテンの断崖が見えたのである。そびえ立つ断崖と山が、私を呼んでいた。

テーブルマウンテンに登りたいという衝動を抑えきれなくなった私は、ホテルのフロントで山への道を早速尋ねた。しかし、誰も道を知らない。まだ GoogleMap も GoogleEarth も使えなかつたころなので、ネットで調べてみても、すぐには登山路の情報が見つからなかつた。目の前に見えているから、山に向かって歩けば何とかなるだろうとシンプルに考えた私は、野外用の服装に着替えて、テーブルマウンテンに向かって歩き始めた。外国人観光客目当ての盗賊にあうリスクも考えて、いざという時に渡すそこの金額のランド紙幣をポケットに入れた。

市街地を抜けたところで、山火事の発生リスクを示す看板があった。後で知ったが、テーブルマウンテン山麓のフィンボスでは、10 年に一回程度で山火事が発生する。ミカン科などの、葉に油をたくさんため込む性質

を持つ低木が多く、これらの低木の落ち葉が発火して、燃えるのだ。実はこれは、競争に弱い低木が生き延びる適応戦略であり、「燃える戦略」と呼ばれている。「燃える戦略」を持つ植物種は、「すす発芽」というもうひとつに戦略を持っており、山火事のあとで土壌中に供給される「すす」をシグナルにして種子が発芽する。こうして、山火事後にすばやく発芽し、すばやく成長して繁殖し、再び燃えやすい落ち葉をためるのである。ちなみに、いま大規模な森林火災が発生しているオーストラリアのユーカリなどにも、「燃える戦略」と「すす発芽」が進化している。雨が多い日本ではなじみがない性質だが、アフリカやオーストラリアの乾燥地に発達した植生では山火事は自然現象であり、さまざまな動植物が「燃える生態系」に適応して生きている。

その「燃える生態系」であるフィンボスに、私は足を踏み入れた。初めて見る植物ばかりだ。興奮しながらしばらく山道を歩いていると、強烈な獣のにおいがした。山道の先を見ると、哺乳類の糞が見える。サバンナとちがって大型の肉食獣はないはずだと思ったが、さすがに棲息している動物についての知識なくこのまま山に入るのは、危険が大きいと思った。幸い、時差調整をかねて会議の2日前に現地入りしたので、翌日も自由に使える。その日はホテルに戻り、情報を集めたうえで、翌日に山頂部を訪問することにした。調べてみると、テーブルマウンテンにはやはり、人間を襲う大型の肉食哺乳類はいなかった。

テーブルマウンテンに登るには、2つのルートがあることがわかった。ひとつは、西斜面の山麓にある駅からロープウェイで山頂部の台地の西北端（ウェスタンテーブル）に登る方法だ。これは楽な登山法だが、植生や景観の変化を観察しながら登る楽しみに欠ける。また、滞在先のホテルはテーブルマウンテンの東側にあり、ロープウェイの駅からは遠い。もうひとつ的方法は、ホテルから徒歩圏内にあるキルステンボッシュ植物園からスケルトンゴルジと呼ばれる谷を登る方法だ。こちらは徒歩での登山になる。もちろん私は、スケルトンゴルジの登山路を使って登ることにした。スケルトンゴルジの登山路をたどると、フィンボスの低木林はやがて、谷沿いに発達したやや暗い森へと変わった。その森の終点は、頂上部直下の

断崖である。落差がもっとも小さい崖に、はしごがかけてあった。そのはしごをのぼって、断崖の上の台地にたどりつくと、そこは別世界だ。エリカ類のお花畠がひろがり、タイヨウチョウ類が花から花へと飛び交う世界が広がっていた。まるで桃源郷にたどりついたような錯覚にとらわれながら山道を歩いていると、双眼鏡でバードウォッチングをしながら山道を歩く、明らかに生物学者と思われる人物に出会った。How are you? Are you a biologist? と尋ねると、なんと翌日からの会議に参加する研究者だった。地衣類の集団遺伝学というかなりニッチなテーマを研究しているスイスのChristoph Scheidegger博士だ。彼はロープウェイでウェスタンテーブルに上り、そこから徒歩でスケルトンゴルジをめざして頂上部の台地を縦断してきたところだった。しばらく偶然の出会いを喜び合ったあと、私はChristophと別れてウェスタンテーブルをめざした。

その後、ケープタウンには会議で何度も再訪した。そのたびにテーブルマウンテンに登り、さらにはケープ州各地の植生を見て回った。ケープ州は見所が多い場所であり、テーブルマウンテンから約30km南には、アフリカ最南端の喜望峰がある。喜望峰にいたる半島部にはフィンボスが広がり、2000種を超える固有植物が生育している。海岸のフィンボスで草を食むケープキリンにも出会った。また、喜望峰の近くには、小柄でかわいらしいケープペンギンの棲息地もある。フィンボスには、ペンギンとキリンが共存している。アフリカ大陸の南端にあり、南極大陸に面したケープ州ならではの、それは不思議な生態系だ。

ケープタウン市内の港、ウォーター・フロントにも出かけた。ここは市の観光名所であり、防犯対策が徹底されているので、観光客は比較的安心して訪問できる。ウォーター・フロントで見たガンブーツダンスの躍动感はすばらしかった。南アフリカの金鉱山で働く鉱夫が生み出したダンスであり、リズミカルな手の動きや、軽快なステップは、鉱山の労働現場を監督する将校の動作へのパロディだということを後で知った。まだ治安に大きな問題を残すとはいえ、アパルトヘイト政策が撤廃され、アフリカ系とヨーロッパ系の人たちが共存の道を歩みだした南アフリカ共和国は、訪問するたびにダイナミックに変化を遂げていた。

やがて3回目の訪問の機会が巡ってきた。今回の訪問は、地球観測に関する会議に出席するためだ。このときも、スケルトンゴルジから台地の南端に登り、ウェスタンテーブルをめざして山道を歩いた。すると、遠くから歩いてくる懐かしい人影が見えた。Hi, Chiristoph. Happy to see you again. Why are you here? 何と彼は、私とは違う会議に出るためにケープタウンを訪問し、その機会を利用してテーブルマウンテンを再訪していたのだった。テーブルマウンテンが呼ぶ声に魅かれる二人が、時を同じくしてケープタウンを訪問すれば、奇跡は当たり前のように起きるのだ。

次に生物多様性関連の会議がケープタウンで開催されがあれば、ぜひ参加したい。そして、もういちどスケルトンゴルジからテーブルマウンテンに登ってみたい。案外また、3回目の奇跡に巡りあうかもしれない。そう思っているのは私だけではないよう気がする。



矢原徹一 やはら てつかず

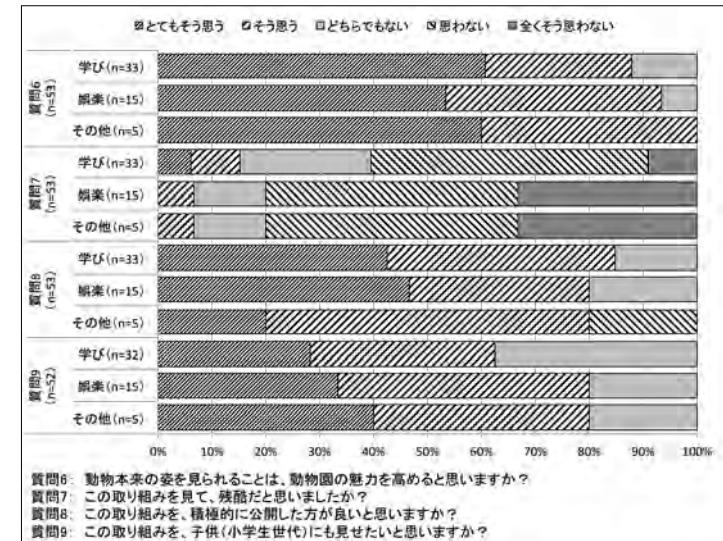
九州大学教授 持続可能な社会のための決断科学センター長

1954年福岡県生まれ。京都大学理学部卒。東京大学助手、助教授を経て1994年より九州大学教授。専門は生態学・進化学。著書に『花の性』『保全生態学入門』(共著)ほか。

正誤表

決断科学第6号41頁（2019年3月23日発行）に誤りがございました。
訂正してお詫び申し上げます。（41頁、図8）

<誤>



<正>

